

# 『想像』する学校防災教材の開発 —阪神・淡路大震災の教訓の語り継ぎを基に—

○中村洋介<sup>1)</sup>・浦川豪<sup>2)</sup>・森永速男<sup>3)</sup>

- 1) 学生会員 兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科、y.nakamura0717@gmail.com
- 2) 学会員 兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科、drgogo502430413@gmail.com
- 3) 学会員 兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科、morinaga@dr.u-hyogo.ac.jp

## 1. はじめに

1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災から25年が経過し、震災を語れる被災者の高齢化が進んでいる<sup>1)</sup>。そのため、被災された人々の経験や記憶をどのように記録・保存し、共有するかは喫緊の課題と言える。また、被災地の学校教職員には、様々な体験、例えば「避難所の運営」、「混乱時の対応」、「教育の再開」などで、難しい判断や意思決定を連続的に迫られた現実があったと考えられる。学校の管理職や教職員のうち、当時中心となって業務にあたった教職員の多くは、現在教育現場を退いている。このままでは彼らの貴重な経験は個人的な記憶として残るだけとなり、教育現場でその生の語りを聴き、学び取る機会が失われてきている。

本研究の目的は、阪神・淡路大震災で起こった事実を当時の教職員の語りから整理し、その時の事実から、今後起こり得ることを震災未経験の教職員が『想像』できる教材を開発することである。報告は別の機会に譲るが、その教材を基に、学校防災マニュアルを通してそれぞれの職場や地域に起こり得ることをより具体的に『想像』でき、各学校に特有の防災体制を『創造』できるようなプログラムの開発も本研究の発展的な目的としている。

## 2. その時、現場では何が起こっていたのか?

### 2.1 事前インタビュー(聞き取り)調査

まず、当時の学校現場で起こっていた事象を幅広く理解するために、西宮市立の教職員の方々(小学校3名、中学校7名、高等学校1名)に対して聞き取り調査を行った。非構造化インタビューで行い、それぞれの経験を自由に語っていただいた。補助資料として西宮市震災記録誌<sup>2)</sup>、<sup>3)</sup>を手元に置くことで、当時を思い出しやすくするように工夫した。これらの語りを整理し、次に行う神戸市立学校教員への質問項目を作成した(図1)。

インタビュー質問項目	「学校で起こった事実をありのままに語っていただき、記録に残す」
I	当時の「 <u>発災から学校再開まで</u> 」を時系列で語っていただけますでしょうか。
1	ご自宅の被害状況は。(例:家中/全壊・半壊・一部損壊)
2	周辺の被害状況は。(例:家屋/火災/交通)
3	初めて学校に行かれたのはいつか。(例:直後/当日の午後/数日後)
4	教職員の参集率は。
5	学校での業務、役割は。詳しく。(例:復旧作業/安否確認/避難所開設/避難所運営/当直/救援物資)
6	避難所開設、運営について。詳しく。
7	トイレの状況。
8	水、食料の状況。
9	連絡手段は。(電話、伝言板等のキーワードが予想される)
10	児童生徒の様子、動き
11	学校再開に向けて。再開時の様子。

図1 作成した質問項目用紙(一部)

### 2.2 神戸市立学校教員へのインタビュー(聞き取り)調査

次に、現場で起こった現実を集約するため、当時神戸市教員だったの方々に対してインタビュー調査を行った。概要は以下の通りである。

- ・方法: 半構造化インタビュー(図1の質問項目用紙を活用。映像と書き取りで記録。)
- ・期間: 2日間にわたり開催(2019年10月19日及び26日)、または別途自宅や職場に訪問して開催
- ・対象: 震災当時、神戸市立の小学校、中学校で勤務されていた教職員10名
- ・インタビューア: 兵庫県立大学防災リーダー教育プログラム専攻生、学生災害復興支援団体LAN学生、筆者ら

### 2.3 インタビューデータの分析

#### (1) 文字起こし

インタビュー時の映像と書き留めた内容を基に語りの全てを文字起こした。その際、可能な限り元の言葉を維持した。

#### (2) 頻出語の抽出(図2)

テキストマイニング(KH Coder3)を用いて頻出語を抽出した。

その中でも名詞に注目し、特に最頻出の「避難」という語に着目

した。なお、この「避難」は学校防災マニュアル内においても頻出しており(避難者対応、避難所開設など)、それが「避難」に着目した根拠の一つである(また、1章で述べたプログラム開発にも繋がる)。

#	抽出語	品詞/活用	頻度
1	避難	サ変名詞	60
2	学校	名詞	55
3	言う	動詞	34
4	人	名詞C	34
5	思う	動詞	32
6	入る	動詞	32
7	来る	動詞	30
8	ボランティア	名詞	29
9	水	名詞C	27
10	あの	感動詞	25

図2 抽出された頻出語(一部)

(3) 「避難」に関わる文のみで共起関係を分析(図3)

最頻出の「避難」を含む文のみを抽出し、語の共起関係を分析した。その結果、様々な判断が迫られたであろう多岐に亘る語、すなわち業務が見えてきた。

(4) 学校周辺の建物の被災地図と業務内容の重ね合わせ(図4)

被災度別建物分布状況図<sup>4)</sup>に業務内容を重ねることで、視覚的に『想像』しやすいものに整理した。

(5) 抽出された業務に関わる映像の編集

(3) で明らかになった業務内容に関わる部分を、インタビュー記録映像から抽出して映像を編集した。その一部を Web 上 ( <https://www.city.kobe.lg.jp/a05822/shise/opendata/shinsai.html> ) で公開中である<sup>5)</sup>。

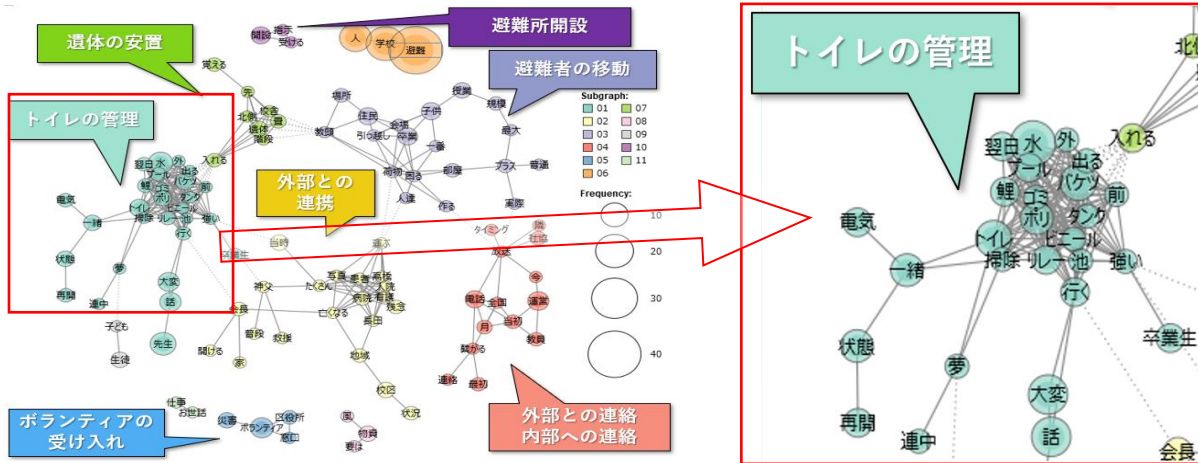


図3 「避難」に関わる文の語の共起関係

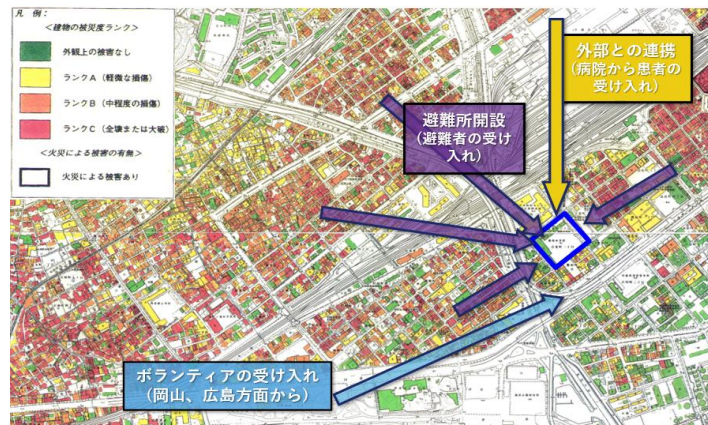


図4 被災地図との重ね合わせ

3. おわりに

本研究では、阪神・淡路大震災で起こった事実を当時の学校教職員の語りに基づいて、震災経験のない教職員が今後起こり得ることを『想像』できる教材を開発することを目的とし、インタビュー内容を分析することで、被災後に起こる業務内容の情報を加えた被災地図と映像資料を完成させた。これらが現場の教職員にとってどの程度の効果があるのかを検証する予定であったが、新型コロナウイルス感染の流行のため実施できていない。今後、この教材を用いた教職員向けの研修を実施し、防災管理体制の『創造』を図りながらその効果を実証したい。

謝辞

本研究を進める上でご協力いただいたすべての方々に深く御礼申し上げます。

参考文献

- 1) 毎日新聞:「語り部6割70歳以上 若い世代の育成急務 神戸大など調査」、2020.9.26 閲覧。  
<https://mainichi.jp/articles/20191225/ddn/001/040/001000c> 2019.12.25.
- 2) 西宮市:1995.1.17 阪神・淡路大震災—西宮の記録—、1996.11.
- 3) 西宮市教育委員会:阪神・淡路大震災記録—ともに生きる—教育のまち西宮—、1996.1.
- 4) 震災復興都市づくり特別委員会:阪神・淡路大震災緊急被害実態調査・被災度別建物分布状況図集 1995.3.
- 5) 神戸市:阪神・淡路大震災「神戸GIS震災アーカイブ」、2020.1 公開、2020.9.28 閲覧。